



映画に
宛てた
ラブ
レター

2016・10月号

天見谷行人

近況報告でございます。

やっちゃった！、ドタキャン3連発

毎月拙書「映画に宛てたラブレター」をお読みいただいている皆様、誠にありがとうございます。

近況報告でございます。

8月末より周期的な「恒例行事」となりました、引きこもり状態になり（僕はうつ病のため、神戸市から精神障害3級と認定されております）ほぼ、寝たきり状態。

当然、映画館に通えない、レビューもかけない。

そして、予定していたイベント3件を、ドタキャンするハメに陥りました。

①高齢者向けサークルから招待されていた、単発イベント「自分史セミナー」をキャンセル（これは当日朝にめまいが発生。病院で点滴を打つハメに）

②神戸舞子公園での、音楽イベント（弾き語りで30分枠を貰っていました）を二日前にキャンセル。

③明石市主催の市民講座の講師をやむなく辞退。

とくに③の辞退は残念無念でした。

講師になるためには書類審査と面接があり、僕はそれに見事合格！

今年12月から翌年3月まで、月1回のペースで、合計4回の「自分史講座」を受け持つことになっておりました。しかし、体調面での不安をかかえ、辞退を決断。

自分の方から、下記の通り明石市担当者にメールを送りました。

「突然のことで申し訳ないのですが、今回の講座を取りやめさせていただきたいのです。以前より、うつ病の治療を継続していたのですが、先日から状態が悪化しており、考えがまとまらない、外出が困難、腹痛嘔吐という状況です。このまま進行させても、皆様に、より大きなご迷惑をおかけすることになると思い、ご連絡させていただきました。当初、自分の方から応募申し込みをしておきながら、このような事態になってしまい、本当に、本当に、申し訳ありません。お取り計らいのほどよろしくお願いいたします」

10月に入り、ようやく、パソコンに向かう元気も出てきたところです。

ご迷惑をおかけした皆様、この場をお借りして、もう一度、本当に、ごめんね。

天見谷行人

エッセイ「僕はなぜ、映画を映画館で見るのか？」

僕はなぜ、映画を映画館で見るのか？

「[マイケル・ジャクソン THIS IS IT](#)」を劇場で観たときのこと。

エンドロールが終わり、最後にもう一度マイケルが現れる。短く軽やかなステップを踏み、映画は終了。

そのときだった。

満席の会場のあちこちから拍手が起こった。

やがてその場に居合わせた僕を含め、全ての観客が拍手を送った。

目の前にマイケルはいない。

ただの白いスクリーンに向かって、僕たち観客は拍手を送ったのである。

それは鳥肌が立つような、感動の一瞬だった。

劇場出口に向かう僕の後ろ、中年夫婦の会話が聞こえた。

「こんなの観たら、日本のなんて子供だましやなあ〜」

映画を映画館で見続けていると、こういう奇跡の一瞬に出会えることがある。

僕が本格的に映画館に通うきっかけになったのは、2004年公開の邦画「[スウィングガールズ](#)」との出会いだった。

それまで僕は20年以上、映画館に行ったことすらなかった。

しかし、そんな僕が「スウィングガールズ」という映画にハマってしまった。この作品は多くの中年おやじを虜にし、ちょっとした社会現象を巻き起こした。

結局、僕はこの作品を劇場で14回観る羽目に陥る。

14回目を観終わったとき、僕は「スウィングガールズ」という作品だけではなく「映画」そのもののファンになっていた。

そして、同じ映画を14回劇場で鑑賞して分かったことがある。

客席の反応は14回、それぞれ全く違っていた、ということである。

このことから僕は、一つ勉強させてもらった。

「映画を映画館で観る」という行為は、実は「ライブなのだ」ということである。

スクリーンでかかっている映画は毎回同じだ。

しかし、その場に居合わせた観客は、まさに一期一会の出会いなのである。

映画と一緒に鑑賞する人たちは、その場限りの「共同体」なのだ。

ただ、残念なことも同時にわかった。

それは「THIS IS IT」のときのような、奇跡の瞬間は、100回映画館に通って、ようやく一回程度しか体験できない、ということである。

僕は「スウィングガールズ」以降、今まで500本以上の作品を劇場鑑賞してきた。

しかし、奇跡と思える瞬間は、これまで5,6回に留まっている。

映画ファンの一人として、多くの人が映画館で映画を観るようになってほしい、と僕は願う。

しかし「ハズレ映画」にあたってしまったら、これもまた大きな落胆があるだろう。

映画を映画館で観るという行為は、まず、スケジュールを調べ、身支度をして家を出るところから、すでに始まっている。

バスに乗り、電車を乗り継ぎ、あるいは車を走らせ、ようやく劇場にたどり着く。どんな作品に出会えるのだろうか、という期待で胸がときめく。すこしばかりワクワクする。

そういった面倒くさい行為を、100回程度繰り返さなければ、奇跡の体験に出会えない。

そこまでして映画を見る必然性がどこにあるのか？

だから一般ピープルである僕たちは、新作映画が発表されても、レンタルビデオ店のDVDで済ませてしまおう、というオチになる。

観客自身の費用対効果、それにネットを始めとするメディアの細分化、および観客の嗜好そのものの細分化、それらを総合して考えると、これからさき、劇場が観客で溢れることは、もうありえないのかもしれない。

そうなる、映画会社は売れ筋の映画しか作らないことになる。当然のように若手映画クリエイターたちの活動のチャンスは少なくなってゆく。

映画会社はリスクを取りたくないのだ。

結果、映画作品はどんどんありきたりになる。つまらなくなる。

まさに負のスパイラル。最悪のシナリオだ。

映画と映画好きに残された道は数少ない。

結局のところ、細分化されてもいいじゃないか。

この際、開き直って、映画の虜、映画の奴隷、映画の狂信的信者、を一人でも増やすことを考えたほうがいいのではないか？

裾野が狭くなってゆく、映画館で映画を見るコアなファンたち。

その狭い隙間が、何やら熱狂している、お祭り騒ぎをしている。そんな映画作品が生まれたり、僕のように何を血迷ったか、映画館にふらふらと迷い込む者がまた一人増えるかもしれない。

僕は両手を広げて歓迎するだろう。

「ようこそ映画の蟻地獄へ」と。

映画好きというのは、別にインテリでもなければ、高尚な趣味でもない。

そこらを誤解されてもらっては困るのだ。

立川談志師匠は落語を「人間の業の肯定である」と言い切った。

「人間としてこんなダメなやつがおりました」と愚かしい人間の行為を笑いに変換し、聴衆にただ提出する。それをどう面白がるのか？ それは聴衆の自由裁量に任される。

同じように、ハズレ映画も数々あるけれど、それでも映画館へ通うのは

「わかっちゃいるけど、やめられない」からだ。

僕がなぜ映画を映画館で観るのか？

それは、映画ファンとしての「業の肯定」に他ならない。

ハドソン川の奇跡

ハドソン川の奇跡

2016年9月26日鑑賞

安全ですよ、ここは劇場ですから。

クリント・イーストウッド監督作品は「ハズレなし！」と思って、観に行ってきました。
やっぱり正解でした。

トム・ハンクス演じる機長役、もう、ほんとに素晴らしかった。

抑制が効いててね、派手に演じすぎない。クリント監督の演出は、とっても自然体です。

また、以前観た[「サンキュー・スモーキング」](#)

[「エンド・オブ・ホワイトハウス」](#)

で印象に残っている、アーロン・エッカート。

本作では、緊急事態の中、冷静沈着なキャラクターの副機長役を演じてます。これがまた、いいんですよ。

ちなみにこの作品96分です。2時間切るんですよ、アナタ？！

それで、これだけギュッと中身が詰まっていれば、これは「儲けもん」の映画でしょう。

「ポケモン」探すより、すぐ映画館へGOです！

本作は、事故で二基あるエンジン全てが壊れた旅客機を、ニューヨーク、真冬のハドソン川へ不時着させ、奇跡的に乗員乗客155名、全員が助かった、という実話を映画化したものです。

巨匠C・イーストウッド監督最新作

イーストウッドの長い監督キャリア史上、最大のヒットとなった傑作「アメリカン・スナイパー」の次に選んだのが「ハドソン川の奇跡」。未曾有の航空機事故からの生還劇の裏に隠された実話だ。前作で戦場という極限の状況下における兵士の人間性を鋭く優しく見つめた巨匠が、その視点で新たに開ける真実の裏側、確かな経験に裏付けられた機長の決断、乗員乗客すべての命を救った英雄への厳しい追及、それでも折れない不屈の信念と、決して揺らぐことのない機長サリーの人間を描き出す。

その日、英雄は容疑者になった

2009年1月15日、極寒のニューヨーク上空850mで155名を乗せた航空機を突如襲った全エンジン停止事故。160万人が住む大都市の真上で、制御不能の70トンの機体は高速で墜落していく。近くの空港に着陸するよう管制室から指示がある中、機長サリーはそれを不可と判断し、ハドソン川への不時着を決断。事故発生からわずか208秒の事だった。航空史上誰も予想しえない絶望的な状況の中、技術的に最も高度の高い水準への不時着を見事に成功させ、「全員生存」の偉業を成し遂げる。

その偉業は「ハドソン川の奇跡」と呼ばれ、サリーは一躍英雄と賞される——はずだった。ところが——機長の“英雄の決断”に思わぬ疑念が掛けられて。本当に不時着以外の選択はなかったのか？ それは乗客たちの危機に陥す無謀な判断ではなかったのか？ 事故調査委員の責難なる追及は、サリーを徹頭まで追い詰める——「救ったのに、なぜ？」待ち受ける試練、突然孤立した彼を支えてくれるのは、自分ひとりで、心から愛する家族だけだった——。

誰が“奇跡”を裁くのか。世界を震わせる真実のドラマが幕を開け

#ハドソン川の奇跡 www.hudson-kiseki.jp @sullymjp wernerbrospn ワーナーブラザーズジャパン 「ハドソン川の奇跡」映画、公開C・イーストウッド監督による傑作

そういえば、今更なんですけど、クリント監督作品って、実話が多くないですか？ みなさん。

「父親たちの星条旗」

「硫黄島からの手紙」

「インビクタス／負けざる者たち」

「ジャージー・ボーイズ」

「アメリカン・スナイパー」

これら、すべて実話ですよ。

ふ〜む、クリント監督、やはり実際に起こった出来事というのは、フィクションより興味深い、映画化すれば絶対、面白い！ という判断をしているんでしょうね。

本作と同じ、旅客機事故を扱った作品として、真っ先に思い浮かぶのは、2013年公開のロバート・ゼメキス監督、デンゼル・ワシントン主演の「フライト」でしょう。

ボク、これ大好きなんです。もう、DVDで何回も見直しちゃったぐらい（ブルーレイディスクだとメイキングも見られてお得感タップリ！）

「フライト」でのデンゼル・ワシントン演じる機長は、本作の機長同様「名人」の域に達したパイロット。でも、仕事のストレス、離婚などの影響なのか、その私生活はもう、ボロボロ。朝っぱらから、コカインとアルコールで、気分は爽快！ハイテンション。

今日も「イッパツ、キメていこうぜ！」（忌野清志郎さんみたい）ロックスターのノリで、ヒョイと機体を飛ばします。

そうとも知らずに乗りこんだ、乗客が可哀想ですな。あとでえらいことを機長がやらかすんですが、それは映画を見てのお楽しみ。

さて、本作「ハドソン川の奇跡」

トム・ハンクス演じるサレンバーガー機長は、スタッフや仕事仲間から、敬愛と親しみを込めて「サリー」と呼ばれています。

本作の原題は「Sully」なんですね。



2つあるジェットエンジン両方が使えなくなる、という、旅客機としては絶望的な状況の中、真冬、極寒のハドソン川へ、旅客機を「着水させる」という「前例がない」ことを成し遂げたの

です。

しかも結果的に全員が生きて、再び家族の元に戻れた。

事故発生から不時着まで、その時間、わずか208秒の出来事でした。

サレンバーガー機長としては、プロフェッショナルとして、乗客を安全に空の旅へお連れするのは、そんなこと出来て当たり前。

どんな事態に陥ろうとも、乗客の命を守ることは、機長として最低限の仕事、義務と捉えている訳です。

このお人柄の素晴らしさ。自分の仕事への誠実さ。

決して自分はヒーローなんかではないのだ、という謙虚な姿勢。

21世紀がはじまって以降、テロや戦争、銃の乱射事件。

嫌になるニュースばかりです。

精神的にダメージを負っていたニュー Yorker たち、さらにはアメリカ全市民。

そこに2009年1月15日。

この旅客機不時着のニュースが飛び込んできたのです。

彼らにとって「サリー」は、待ちに待った久々のヒーロー。

アメリカ人はヒーロー大好きですもんね。

それも映画や作り物の世界じゃない、実際に奇跡を起こした、生身の人間なのです。

その偉大な功績はまさに「英雄」と呼ぶにふさわしい。

しかし、ここに立ちはだかるのが、事故調査委員会のお役人たちです。

彼らは事故機の状況を、データをもとに再現。コンピューターでシュミレーションを行います。

結果は

「安全に空港に戻れたはずである」

機長は「着水させた」のではなく「ハドソン川に墜落させたのだ」と事故調査委員会は断定します。

世間から、もてはやされ、人気の階段を一気に駆け登らされた、サリー機長。

まさにここでハシゴを外されてしまった訳です。

一転、彼は、155人の命を危険にさらした「容疑者」にされてしまいます。

やがて公聴会で、事の真相が明らかとなってゆきます。

この作品、スリルある導入部、事故発生時のリアルな状況の再現、さらに事故調査委員会メンバーと、機長たちとの密室劇。

これらのシーンが、とってもバランスよく編集されてますね。

本当にうまいです。

それにエンドロールがこれまた、いいんだなあ～。

音楽好きなクリント監督らしく、ニューヨークの高級ジャズクラブで聴けるような極上の音楽がタップリ楽しめます。

あなたが思うように、僕も一度、サリー機長の操縦する飛行機に乗ってみたいものですね。
ちなみに、本作での事故原因となった、鳥との衝突「バード・ストライク」については、邦画の
矢口史靖監督作品「[ハッピーフライト](#)」で詳しく描かれております。

こちら楽しい作品ですよ。おすすめです。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆☆

作品データ

監督 クリント・イーストウッド

主演 トム・ハンクス、アーロン・エッカート

製作 2015年 アメリカ

上映時間 96分

「[ハドソン川の奇跡](#)」予告編映像

君の名は。

君の名は。

2016年9月27日鑑賞

「前前前世」から、君と僕は.....。

ネット上や、マスコミでは、本作について、やたらと騒がしいですな。

僕なんかは、根っからのひねくれ者で、おまけに「四捨五入すると還暦」オヂさんです。

「メガヒットなんて、誰が観てやるもんか」と当初は思っていたのですが、予告編を見ると.....

美しい映像と、その世界観にヤラれました。

劇場にしてみると、やっぱり十代、二十代のカップルが多くいましたね。

彼氏や彼女を誘う口実には、本作はもってこいの「デート・シネマ」なのでしょうね。

青少年諸君！！

不純な動機で映画館に行くのは、大いによろしい！

青春とは「不純」や「よこしまな心」そのものであります。

もしかしたら、お相手の方と、次のステップに進めるかもしれませんよ。

まあ、そのあとは自己責任。

いろいろと、ヨロシク、ヤっちゃってちょうだい。

え〜っと、なんでしたっけ。

そうそう「君の名は。」ですよ。



監督は新海誠さん。

僕は「初体験」なんですけど、まず思ったこと。

「えっ、今更このネタ、ブッコむの?!」

作品の背骨と言っていい、ストーリーのモチーフが、もうそれこそ、何回も使い古されたネタばかりなんですね。

まずは[「男女が入れ替わるテーマ」](#)は、かつて大ブームとなった、大林宣彦監督の「転校生」

実はこの「男女逆転ストーリー」

その発想は、800年以上前に遡ります。

平安時代後期に書かれた「とりかえばや物語」がそれです。

漫画にもなっていますし、現代語訳も多数あります。

特に田辺聖子さんの[「とりかえばや物語」](#)は名訳でしょう。

本作の主人公「宮水三葉」の声は、上白石萌音さん。

[「舞妓はレディ」](#)

での100%混じりっけなしの、ど田舎出身者、というキャラクターが素晴らしかったですね。

21世紀の現代日本に、こんな女の子がいたのか！ という驚きがありました。映画というのは、ときどきこういう奇跡を起こすんですね。

さて、女子高生である宮水三葉は、代々続く神職の家系に生まれました。

神社には古くから伝わる、古式ゆかしい『年中行事』というものがあります。

そこで彼女は神様に奉納する「舞」を踊るんですね。

さらには、彼女自身が、お神酒を作って御神体に献上します。

このお酒の作り方、ちょっと”ギョツ”とする方法なんです。

まあこれは映画本編をごらんください。

21世紀のハイテク日本社会で、いまだに古式ゆかしい世界観が展開される本作。

これまでの日本のアニメにおいて、このような土着の神様との関わりについては、

[「となりのトトロ」](#)

[「もののけ姫」](#)

[「千と千尋の神隠し」](#)

など、ジブリ作品で、もう散々、描かれてきた「ネタ」なんですね。

トトロだって、猫バスだって、[アニミズム](#) から派生してきたもの、と見ることもできるでしょう。

また本作では、もう一人の主人公である、都会の青年「立花瀧」が、自分の体に憑依した、田舎暮らしの女の子に会いに行こうとします。

ここで彼は、ある衝撃的な事実を突きつけられるのですが……。

この作品、都会と山村における、日々の暮らしの違いを、実に丹念に描いて行きます。

それにより、あまりにも違いすぎるお互いの暮らし、生活様式。

その対比の鮮やかさを、クッキリと際立たせることに成功しています。

それに、アニメによくありがちなんですが、本作でも、宇宙と関係があるんですね。

1,000年ぶりに、とある彗星が近づいている今の日本、という舞台設定なんです。

ありふれた日常生活と、唐突にSF的な宇宙観とを結びつける、ということでは、膨大な作品を残した漫画の神様「手塚治虫」をはじめとして、松本零士さんなど、一連の系譜があります。

そして何と言っても筒井康隆さんの[「時をかける少女」](#)を忘れてはなりません。

本作でも「これって”時かけ”のパクリ？」

と思わせる、時間と空間の瞬間移動が出てきたりします。

もちろん、それは最新の量子理論や宇宙論に裏打ちされています。

それにどうやら、平行宇宙論の考え方さえも取り入れているように、僕は感じました。

本作の特筆すべき点は、すでに使い古されたモチーフ、テーマを、いわば「物語のリフォーム」

によって、あっと驚くような最新作として、僕らの目の前に投影させた事にあります。

こんなにも「古い」のに、こんなにも「新しい」。



最後に音楽について。

56歳の僕にとっては、劇中音楽がちょっと過剰な感じ。

これは、若い人たちにはちょうど「良い加減」なのかもね。

テーマ曲を演奏するのは「[RADWINPS](#)」

ボーカルの野田洋次郎さん。

僕は、彼が俳優として主演した「[トイレのピエタ](#)」が目には焼き付いて離れないのです。

こんなにも「儚い」存在感を持った若者が、今、ほら、そこに立っている。

もうそれだけで、胸がいっぱいになるような作品でした。

彼のバンドと音楽。その、激しさの中に「仄かに」感じられる「儚さ」

それが多くの日本の若者を虜にする理由なのかもしれません。

もしかすると、平行宇宙の時空に漂う「古えのニッポン」

そこには

「もののあはれ」「人のあはれ」

という「言の葉」が、量子論的な混沌さで「フワふわ」と漂っているのかもしれません。

この手で、その言葉を捕まえようと手を伸ばすと、突然、姿を消し、他の平行宇宙へ消え失せて

しまう。

その時空間は、現在と過去がゴツチャゴチャに混じり合った、カオスの世界なのかもしれません。

そこから「コトノハ」を体に降臨させ、歌詞を作り、曲を作り、そして物語を紡ぎ出す。

新海誠監督、そして野田洋次郎さん、彼らは異次元空間と交信できる、現代における、ある種の呪術使い、シャーマンたち、なのかもしれません。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 新海誠

声の出演 神木隆之介 上白石萌音 長澤まさみ

製作 2015年

上映時間 107分

[「君の名は。」](#) 予告編映像

2016・10月号 映画に宛てたラブレター

<http://p.booklog.jp/book/110202>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/110202>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/110202>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ